様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１２１７０

研究課題名（和文）看護職を対象とした倫理的成熟に向けた教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of education program aimed ethical maturity for nurses

研究代表者
志田　京子（Shida, Kyoko）

大阪公立大学・大学院看護学研究科　・教授

研究者番号：２０５８１７６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：Ethical Maturity の6つの構成要素において第5段階における（倫理的平穏）の重要性が示唆された。つまり、いくら倫理的に正しいと信じ、行動、対話したからといって、この平穏がもたらされなければ成長にはつながらないということであった。職場環境として組織全体の倫理的実践に対する考え方や風土に着目する必要があることがわかった。倫理的成熟のためのシミュレーションプログラムにおいては、個々のリフレクションを促進できることはわかったが、組織ダイナミクスを考慮した教育プログラムに精錬するために、システム思考アプローチを加味したものを今後検討することを課題とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今回の研究目的は以下の２つであった。１）看護職の倫理的成熟指標の作成、２）看護職の倫理的成熟のための教育プログラム開発である。看護師個々の倫理的成熟に着眼点を置き、シミュレーション教育方法を採用、リフレクションサイクルを促進できるようなプログラムを作成した。参加者より理解が促進したという評価を得られたが、OffJTの場での学びであることから、組織ダイナミクスの視点をおいたプログラムの開発方法が望まれた。本研究は、看護職の倫理的実践能力を組織要因も絡めて、あらゆる立場で働く看護師にとって学びになる機会をもつことを目指すもので、組織開発アプローチを包括したプログラムに発展させる貴重な資料となる。

研究成果の概要（英文）：Among the five components of Ethical Maturity, the importance of (ethical calm) in the fifth stage was suggested. In other words, no matter how much one believes, acts, and talks about something ethically correct, if this calm is not achieved, it will not lead to growth. It was found that it is necessary to pay attention to the way of thinking and culture of the entire organization regarding ethical practice as a workplace environment. Although it was found that the simulation program for ethical maturity can promote individual reflection, it is a task to consider in the future to add a systems thinking approach in order to refine it into an educational program that takes organizational dynamics into account.

研究分野：看護管理、看護倫理

キーワード：倫理的成熟

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

平成 29 年度より前年度までの「看護師の倫理的成熟とその影響要因に関する検討」より継続し、教育プログラムの開発に取り組むこととした。これまで、倫理的成熟には個人要因としての自己肯定感、看護師アイデンティティが、環境要因としては上司のリーダーシップ、コスモポリタンな倫理的組織風土が影響すること、さまざまな事例におけるカンファレンス時のパワーダイナミクスが関わることが、観察を通じて明らかになった。したがって、個々の倫理的成熟を高めるためには、まずはその指標開発とユニット単位を対象としたプログラムアプローチが適切であると示された。

２．研究の目的

１）看護職の倫理的成熟指標の作成

２）看護職の倫理的成熟のための教育プログラムの開発

３．研究の方法

１）

令和 2 年度　海外における倫理的成熟に関する文献を検討するとともに、Ethical Maturity の著者に会い、成熟のための教育研修に参加をし、知見を得る。プログラム教育評価指標について討議し、その情報をもとに試験的な成熟指標案を作成した。

２）

（1）平成 29 年度　ハワイ大学看護学部 THSCC にてカリキュラムディベロップメントのワークショップに参加した有志（看護教員）とともにシミュレーション教育プログラムを作成。

（2）平成 30 年度　病棟事例を作成し、有志を募って認知症をもつ入院患者をケースとしたシミュレーション教育プログラムを開発し、臨床看護師 10 名程度を対象にシミュレーション研修を実施。

（3）平成 30 年・令和元年度　300 床未満の病院管理者 7 名（有志）を対象に上記のことについて 2 時間程度のフリーディスカッションを計 3 回実施。

（4）令和元年度　認知症をもつ入院患者がせん妄を発症した際の倫理的配慮についてどう考えるか、シミュレーション教育の中で気づきをもたせるプログラムに洗練。

（5）令和 2 年度　地域で実施する新人看護師勉強会において新人を対象とした「看護倫理と実践への応用」について研修を実施。

（6）令和 3 年度　組織文化の気づきに焦点をあてた事例検討と方法を学習するため、研究分担者とともにシステム思考に関する研修（4 日間）に参加。

（7）令和 4 年度　看護職のためのシステム思考トレーニングのためのシナリオを作成。

（8）令和 5 年度　組織ダイナミクスの中で倫理カンファレンスがどのように行われているかを明らかにするために、病棟での倫理カンファレンスへの参加観察を実施。

４．研究成果

当初 3 年予定で実施予定であったが、令和 2 年から令和 4 年にかけて新型コロナウイルスの蔓延により研究着手が困難となった。そのため、研究期間を令和 5 年まで延長した。

１）Ethical Maturity の著者である Michael Carrol 氏と Elizabeth Shaw 氏との面談を予定していたが、対面はかなわず、Carrol 氏のみオンラインでの討論となった。

Carrol 氏によれば、Ethical Maturity の構成要素は 1. Ethical sensitivity(倫理的感受性) 2. Ethical discernment（倫理的識別）3. Ethical implementation（倫理的実践）4. Ethical conversation（倫理的対話）5. Ethical peace（倫理的平穏）6. Ethical growth and development of moral character（倫理的成長と道徳性の発達）である。これらは順をたどるプロセスであり、チェーンとなって再び 1 に戻る。

このプロセスにおいて、第 5 段階における（倫理的平穏）の重要性が示唆された。つまり、いくら倫理的に正しいと信じ、行動、対話したからといって、この平穏がもたらされなければ成長にはつながらないということである。看護職がこの平穏を感じるためには、個々の倫理実践力を高めるだけでは不十分であり、組織の中でその行動の正当性が認められることが肝要である。職場環境として組織全体の倫理的実践に対する考え方や風土に着目する必要があることがわかった。

２）作成した認知症シミュレーション教育プログラムは①シナリオ、②事前学習資料、③開始から終了までの進行工程、④デブリーフィング方法であった。実施は平成 30 年度に 2 回、令和元年に 2 回実施した。

病院管理者とのフリーディスカッションでは、せん妄患者の対応には認知症研修を受講して

いるか否かが大きく関わること、「自分の親だと思うと・・・」といった情緒的に言動や行動を決めている傾向がある、ということ、普段の患者を表現するときの言葉で看護師がどのような対応をしているか想像できる、など管理者独自の視点で看護師を観察していることがわかった。

新人研修においては、倫理的感受性の重要性に気づかせることをねらいとしたシナリオを用いて実施した。令和 2 年-5 年まで実施しているが、学生の理解度自己評価は概ね高い。（表 1）

2022 年度研修自己評価 n=44

	よくあてはまる	あてはまる	どちらともいえない	あてはまらない	全くあてはまらない
倫理と道徳･法の違いが理解できた	11	31	2	0	0
専門職と職業倫理の関係性が理解できた。	16	27	1	0	0
道徳性感受性、道徳的苦悩、倫理的ジレンマ道徳的レジリエンスについて理解できた。	16	22	6	0	0
自分自身の価値観がどのように形成されているかを振り返ることができた。	16	25	3	0	0
ジレンマに陥ったときの倫理的意思決定プロセスを理解できた。	14	28	2	0	0
集団で行う意思決定プロセスが理解できた。	16	26	2	0	0

システム思考トレーニングにおいては、システムループの考え方をもとに、様々な倫理的葛藤が生じている臨床での自称について、倫理的価値観の対立の問題と職場のパワーの問題に整理する方法を学び、今後教材として活用する事例検討とそのシナリオ作成に有意義な学びを得た。

倫理的職場風土の在り方と課題を考えることにつながるプログラムに修正していった。シナリオについては、看護管理者との討論議題として持ち寄り意見聴取を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 志田京子　長畑多代　田嶋長子　堀井理司　北村愛子　澤井元	４．巻 24
２．論文標題 大阪府内の中小規模病院における退院調整の現状と看護師の教育ニーズ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大阪府立大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 67－76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡田純子　志田京子	４．巻 48
２．論文標題 経験2-3年を有する看護師のクリニカルリーズニング向上支援プログラムの内容妥当性・実用性・有益性の検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都橘大学研究紀要	６．最初と最後の頁 173-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 志田京子　中山美由紀	４．巻 27
２．論文標題 シミュレーション教育プログラムの可能性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 整形外科看護	６．最初と最後の頁 97-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 岡田純子　志田京子
２．発表標題 経験2-3年を有する看護師のクリニカルリーズニング向上支援プログラムの開発
３．学会等名 日本看護科学学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Y. Kagawa, K. Shida, K. Eguchi, Y. Mastushita, M. Nakayama, S. Uemura, Y. Itojima, M.Furugai.
２．発表標題 Evaluation of Nursing Intervention Related to BPSD in a Simulated Training for Clinical Nurses
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nurinsg Science.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 K. Eguchi, Y. Kagawa, K. Shida, K. Eguchi, Y. Mastushita, M. Nakayama, S. Uemura, Y. Itojima, M.Furugai.
２．発表標題 Effectiveness of a Simulated Traning Program for Nruses to Improving Demenita Care Skills
３．学会等名 International Council of Nursing, 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 志田京子、江口恭子、香川由美子、松下由美子、中山美由紀、植村小夜子、糸島陽子、古谷緑
２．発表標題 臨床看護師の統合的実践力を高めるための模擬患者を用いたSimulation-Based Training の企画と実施
３．学会等名 第39回看護科学学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 志田京子、西野万寿子、仲上静香、高浦聖乃
２．発表標題 地域包括ケアを推進する認定看護管理者を活かす―地域密着病院としての試み
３．学会等名 第23回日本看護管理学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 志田京子
２．発表標題 地域包括ケアを推進する中小規模病院看護管理者支援事業の試み
３．学会等名 日本看護管理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shida Kyoko, Muya Makiko
２．発表標題 Different perception of necessity of management skills between presidents and nurse administrators
３．学会等名 28th Sigma Theta Tau International Research Congress（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Shida Kyoko, Iida Kieko, Teshima Megumi, Yoshida Chifumi, Katsuyama Kimiko
２．発表標題 Opinions of Nurse and Business Administrators Working in Japanese Small-sized Hospitals on the Necesssity of Nursing Managerial Abilities
３．学会等名 International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 志田京子　長畑多代　堀井理司　北村愛子　田嶋長子　澤井元
２．発表標題 A自治体にある中小規模病院における退院調整機能の現状
３．学会等名 第37回日本看護管理学会学術集会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	江口　恭子 (Eguchi Kyoko) (10582299)	秀明大学・看護学部・准教授 (32513)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関